

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

親子の信頼関係を深める「コーチング」

学校でも、会社でも教えてもらえないコミュニケーションの技術を、ぜひ使ってみませんか？



ご視聴は二次元コードから

置き忘れたカバン

それは、私が小学校の教頭として多忙な校務に追われていた3月初旬のことです。夜遅くに仕事を終え、終電近くの電車で帰宅する途中でした。あまりにも疲れて...



続きは二次元コードから

気づきが得られる **学びの動画！**

ニッケ教育研究所
理事長 **楠本 景央** 氏



スマホで読める **感動のコラム！**

ニッケ教育研究所
顧問 **勝本 孝夫** 氏
元・大阪市立榎本小学校校長
元・大阪市立姫里小学校校長



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？ 子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

私は、新卒で松下電器(現・Panasonic Group)に入社し、22年間お世話になりました。松下幸之助氏の「物を作る前に、まず人を作る」との思想の下で、「人」としての成長を意識しながら毎日の仕事に取り組んでいました。仕事で行き詰まったとき、「本当にできることはすべて行っただろうか、可能なことはすべて考えつくしたのだろうか」と心に問いかけ続けると、ある日、突然、解決方法が見つかるという経験を何度もしてきました。エジソンは、「私は失敗したことがない。ただ、1万通りのうまくいかない方法を見つけただけだ」という名言を残しています。「間違い」や「上手くいかなかったこと」は「失敗」ではなく「学び」です。「成功の反対は挑戦しないこと」、「失敗とは諦めること」と言われます。子どもたちが、多様な人とのつながりや「挑戦」から様々な視点で学び続け、考え続け、やり抜くことができる環境が重要と感じています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



FOLLOW US!



特集

未来につなぐ学校づくり 第10回

「教室は間違るところ」から始まる学び

～ 安心・挑戦・成長の学び舎 ～

私がつくる子どもの笑顔 第21回

素敵な笑顔に出会う学校に

連載コラム

“子どもの幸せ”を教育のど真ん中に

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真はストラスブール(フランス)です



子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくこととなります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第10回は、大阪市立白鷺中学校の谷塚高雅校長です。

第10回 「教室は間違うところ」から始まる学び ～ 安心・挑戦・成長の学び舎～

《大阪市立白鷺中学校》 たにつか たかまさ 谷塚 高雅 校長

この4月に異動となり、白鷺中学校の校長として新たなスタートを切りました。これまでの経験を活かしながら、教職員、そして保護者・地域の皆さまとともに、よりよい学校づくりに取り組みたいと考えています。ここでは、前任校の加美中学校での実践についてご紹介します。

加美中学校（大阪市平野区）は、1887（明治20）年に町村制施行以前のくらつり小学校と正覚寺小学校が統合され、現在の加美小学校の位置に「菟華尋常小学校」として発足したのが始まりです。その後、1944（昭和19）年には「南部小学校」と校名を改め、さらに終戦後の六三制の教育改革により、1947（昭和22）年に「大阪府河内郡加美村立加美中学校」として新たに出発しました。そして1955（昭和30）年には「大阪市立加美中学校」となり、現在に至ります。

このように長い歴史と伝統をもつ加美中学校は、開校以来「人権尊重」を教育の基盤とし、「知・徳・体」の調和のとれた全人的な教育をめざしてきました。



学校教育目標 自ら考え、判断し、協働しながら主体的に表現できる生徒の育成

重点目標

1. やり抜く力を育てる
2. 自己肯定感を高める
3. 協働する力を伸ばす
4. 自ら学び続ける姿勢を育む

学びを支える「安心できる教室」

本校の教育の原点は、「教室は間違うところ」という考え方です。「間違い」や、「わからなさ」を受け入れることを大切に、互いの考えを尊重し合える雰囲気づくりを進めています。生徒が安心して発言し、仲間と考えを重ねながら学び合う授業を通して、「わかる喜び」「つながる楽しさ」「学び続ける力」を育てています。このような**安心感のある学習環境**が、生徒の主体的な学びを支えています。



一人ひとりの居場所を大切に『ひだまり』

一方で、登校や教室に不安を感じる生徒のために、安心して過ごせる居場所『ひだまり』を設置しています。一人ひとり

のペースに寄り添い、学習支援や生活面でのサポートを行っています。「**学校には自分の居場所がある**」と感じられることが、再び学びへ向かう力につながっています。

言葉を通して考える力を育てる「授業づくり」

教職員一同、生徒が言葉を通して考えを深め、自分の思いを表現できるよう、「**言語活動を中心とした考える力の育成**」に取り組んでいます。書く・話す・聞くといった活動を授業の中に

意図的に位置づけることで、生徒は自分の考えを整理し、仲間の意見と比べながら学びを深めています。「なぜ、そう考えたのか」を言葉にする経験が、思考力と表現力を育てています。

大阪市の研究支援事業を活用した「授業力・指導力の向上」

本校は大阪市の研究指定を受け、授業力を含めた教職員の指導力向上に組織的に取り組んできました。横浜国立大学名誉教授の高木展郎先生をはじめ、大学教授を招聘し、理論と実践の両面から継続的な指導助言をいただいています。「学びのプラン」を軸に**生徒の思考の流れを意識した授業づくり**を進めることで、「教える」授業から「学びを共に創る」授業への転換を図っています。

※「学びのプラン」とは、授業づくりにおいて生徒の学びの流れを意図的にデザインするための設計図です。単なる指導案とは異なり、教師が「どのように学びをつなげたいか」「生徒にどのように考えさせたいか」を明確にすることで、生徒の主体的・対話的で深い学びを支える『思考の道具』として位置づけています。

目的	
生徒にとって	授業の見通しをもつこと。自分の学びの道筋を自覚すること。
教師にとって	「今日の授業で何を考えさせたいか」「どこで深めるのか」を明確にすること。
主な構成要素<4つの柱>	
①問いめざす学び	学習の出発点となる問いや課題を明確にします。生徒が「なぜ？」と感じ、自ら考えようとする導入を意識します。
②見通し学びの展開	授業のねらいや学習の流れを、生徒自身が理解し、見通しをもって取り組めるようにします。
③見取り学びの観察	生徒の思考や表現、つまづきをどのように見取り、支援するかを整理します。
④振り返り学びの深化	学んだことを自分の言葉でまとめ、次の学びへとつなげます。



先進校に学び、本校の実態に生かす

教職員の学びを学校全体の力につなげるため、全国の先進校へ教員を視察派遣しています。授業や学校づくりの工夫を直接学ぶことで、新たな視点や気づきを得ています。視察で知り得た各校の実践は、そのまま導入するのではなく、本校の生徒の実態や地域性を踏まえて工夫し、日々の授業や教育活動に生かしています。私たちは「**外から学び、内で育てる**」という姿勢を大切にしています。

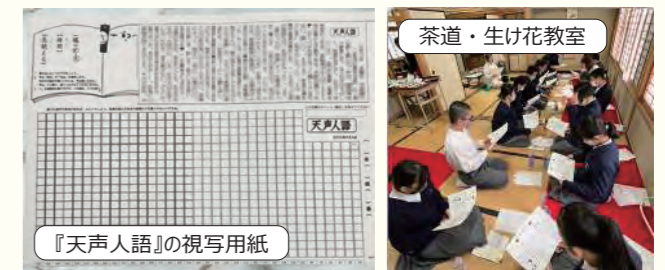
教育の視察派遣実績

2022年度	5人	茅ヶ崎市立松浪中学校、鹿角市立花輪中学校 など
2023年度	16人	丸亀市立西中学校、大垣市立興文中学校、郡上市立八幡中学校 など
2024年度	19人	小城市立牛津中学校、玉野市立庄内中学校、鳥取市立桜ヶ丘中学校 など
2025年度	13人	筑波大学付属中学校、鹿児島市立長田中学校、西条市立西条南中学校 など

学校元気アップ本部事業との連携

学校元気アップ本部事業と連携し、**生徒の学びと安心を支える**取組を進めています。『天声人語』の視写活動により語彙力や文章力の向上を図るとともに、各種検定への挑戦支援や図書室整備を進め、学習環境の充実に努めています。また、生け花や茶道教室などの伝統文化体験、季節の植物を植える環境整備にも取り組み、生徒が文化や自然に親しむ機会を大切にしています。

※『天声人語』は朝日新聞1面のコラム



非認知能力の育成と、未来につながる学び

本校では、これまで培ってきた「言葉で考え、表現する力」を土台に、自己肯定感・協働性・粘り強さといった**非認知能力の育成**にも力を入れています。文化発表会や芸術鑑賞、生徒会活動など、生徒が主体的に関わるさまざまな活動を通して、仲間と協力しながら挑戦し、やり抜く経験を重ねています。



文化発表会～YMCAを大合唱

非認知能力は「特別な指導によって身につくもの」ではなく、生徒が本気で関わらざるを得ない活動の中で育まれるものだと考えています。うまくいかない場面に直面しながらも考え続け、仲間と支え合い、再び挑戦する——そうした経験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高め、学びに向かう力を育てています。



芸術鑑賞～吉本新喜劇とともに

おわりに

これからも、「安心して間違え、安心して挑戦できる教室」を大切にしながら、教科の枠を越えた学びを通して、生徒

一人ひとりの未来につながる力を育成していきます。

私がこくろ 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第21回は、大阪市立大開小学校の麥田葉子校長です。

第21回

素敵な笑顔に出会う学校に

《大阪市立大開小学校》 麥田 葉子 校長



本校（大阪市福島区）は、1920（大正9）年10月25日に大阪市第五西野田尋常小学校として開校しました。1947（昭和22）年4月には現在の大阪市立大開小学校と改称され、2020（令和2）年に創立100周年を迎えた歴史と伝統のある学校です。

また、この地域は松下幸之助氏の創業の地としても知られ、歴史文化の豊かなところです。親子何代にもわたって本校に通ってこられた方も多く、子どもたちは地域の皆さまの人情味あふれる温かい見守りの中で、のびのびと育っています。

校訓

よく考え ねばり強く すすんです

学校教育目標

豊かな心を持ち、たくましく生きる子どもの育成

めざす子ども像

- 自他を大切に子ども
- 互いに学び合う子ども
- 主体的に考え判断する子ども
- 健康で安全な生活をする子ども

「渋沢栄一像」里帰り展示

一昨年度、東京都北区にある渋沢史料館の方から本校に一本の電話がありました。本校の卒業生と思われる十人の方が描いた渋沢栄一の肖像画を所蔵しており、それらを「渋沢栄一肖像展Ⅱ造形作品」で展示したいという内容でした。新紙幣の一万円札の肖像に渋沢栄一が選ばれたことを受けてのお話でした。調査の結果、それらの肖像画は、本校が大阪市第五西野田尋常小学校であった1925（大正14）～1926（大正15）年頃に描かれたものであることが分かりました。昨年度は渋沢史料館で展示され、今年度は約百年の時を経て、本校での里帰り展示を行いました。展示に合わせ



里帰り展示

て、現在本校に在籍している子どもたちが渋沢栄一について調べた自由研究作品も掲示しました。子どもたちは自主的に調べる中で、教科書の中の人物だった渋沢栄一が、自分たちの学校や地域と深くつながっていることを実感しました。また、渋沢栄一が単に「偉い人」ではなく、多くの社会事業や教育を支えた人物であったことを自ら発見し、多角的な視点を持つようになりまし。自分の利益だけでなく、みんなの幸せのために行動する人物だったからこそ、新一万円札に選ばれたんだ」という感想をもった高学年の子どももいました。



子どもたちの自由研究

百年前の先輩たちが描いた肖像画は、2025（令和7）年度の子どもの自由研究作品とともに展示しました。保護者や地域の方々にもお越しいただき、渋沢栄一と本校には今まで知らなかったご縁があったことを共有しました。子どもたちは、この展示を通して、時代を超えたつながりを感じ取っていました。

「松下幸之助」創業の地

和歌山県で生まれた松下幸之助は、9歳で親元を離れ、大阪で丁稚奉公として働き始めました。15歳で大阪電灯（現・関西電力）に入社し、1918（大正7）年、23歳で大開の地に「松下電気器具製作所（現・Panasonic Group）」を創業しました。大開公園には「松下幸之助創業の地」として、『道』と刻まれた立派な石碑が建てられています。松下幸之助は、仕事だけでなく人を大切にすることを信条とし、地域や学校にも思いを向けていました。保護者会の初代会長（現・PTA会長）として本校を支え、地域の発展にも力を尽くされました。

「大開町と松下幸之助事業委員会」の皆さまは、松下幸之助が大開でどのように事業を始め、どのような功績を残したのかを、さまざまな形で紹介されています。その一環として、本校では4年生以上の児童と保護者に向けて講演をしていただきました。話を聞いた子どもたちは、「あんなに小さな場所から世界的な会社になったんだ」「自分も将来、新しいことに挑戦してみたい」と語り、松下幸之助の「あきらめない心」を強く感じ取ったようです。

また、本校の校長室には「素直」と揮毫された書が掲げられています。これは松下幸之助が最も大切にされた言葉で、「私心にとらわれず、物事のありのままの姿を見て、何が正しいかを判断する」という深い哲学が込められています。校長室を訪れる子どもたちや保護者、地域の方々にその精神を伝えるとともに、本校の大切な柱の一つとしています。子どもたちがこれからも希望をもって広い心で学び、人生の道を大きく切り開いていくことを願っています。

※ なお、「創業の地」は大阪市東成区玉津とされています（出典：東成区ホームページ）。



大開公園入口にある石碑

揮毫の書

「大開書店」で新しい本との出会い

本校では、子どもの読書活動を活発にするために、さまざまな取組を行っています。その一つが、読んだ本の魅力を他の人に紹介する「読書ノート」です。読書ノートには、心に残った場面やその本を選んだ理由などを書きます。また、子どもたちの読書ノートを集めたものを「大開書店」として発行しています。ここで紹介された本は、貸し出し数がぐんと増えます。

さらに、本校独自の「読書通帳」を作成し、低学年は読んだ冊数、高学年はページ数を記録しています。そして、学期ごとに表彰を行っています。表彰にはブロンズ賞・シルバー賞・ゴールド賞・プラチナ賞があり、プラチナ賞は児童朝会で校長が表彰状を渡します。それ以外の賞は、給食の時間に放送で名前を読み上げています。子どもたちは、決まっている図

書の時間や読書タイムのほか、休み時間の図書館開放も楽しみにしています。「校長先生、もう少しでプラチナ賞だよ」と嬉しそうに報告してくれる子どもたちの笑顔は、とても素敵です。これからも、よい本との出会いの場をつくり、子どもの豊かな心を育てていきます。



読書ノートを集めた「大開書店」

サポートルーム「のびっこ」

不登校の児童生徒への対応は全国的な課題であり、本校も例外ではありません。そのため、本校には、教室で過ごすに子どもを対象としたサポートルーム「のびっこ」を設けています。ここは、子どもにとって居心地のよい空間であり、自分のペースで学習や活動に取り組むことができます。「特に理由はないけれど学校に行きたくない」「教室に入りたくない」といった理由で欠席の連絡があった場合でも、まずは学校に来られ

るよう働きかけ、サポートルームを校内の居場所として活用しています。子ども一人ひとりの状況に応じた支援を行ってきたいと考えています。



「のびっこ」室内の様子

おわりに

子どもたちが「おはようございます」と元気に登校し、「今日も楽しかった。頑張った」と笑顔で下校していく——。そのために、まずは教職員が笑顔で『チーム大開』として一丸となり、子どもたちと向き合うことを大切にしています。子どもたちが大開小

学校を誇りに思い、「通ってよかった」と感じられる学校に。保護者の皆さまには「通わせてよかった」と思ってもらえる学校に。そして教職員にとっても「勤めてよかった」と思える学校となるよう、これからも努めてまいります。

“子どもの幸せ”を教育のど真ん中に②

長年、教育の現場に身を置いてきた私は、「教育の目的は何か？」について考え続けてきました。言うまでもなく、教育は単なる知識の習得ではなく、人間としての成長と社会的持続的発展を両立させる営みです。では、教育の根源的な目的とは何でしょうか。私が導き出した結論は、「教育は“子どもの幸せ”のためにある」ということです。



《ニッケ教育研究所顧問》 かつもと たかお
勝本 孝夫
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

はじめに

前号では、“子どもの幸せ”とは何かをより具体的にイメージするために、三つの視点から考えてみました。今回は、これらの視点を踏まえ、子どもたちの一歩成長した姿が見られた実践事例をご紹介します。

- 1 「学ぶ力」と「学び続ける力」の向上が、子どもの喜びにつながる。
- 2 学び続ける過程には、「相対的な幸せ」と「絶対的な幸せ」があり、この2つが互いに影響し合いながら深まっていく。その過程そのものに“子どもの幸せ”がある。
- 3 「人とのつながり」が、生涯にわたって学び続ける力の源になる。

空を見つめる子

小学校5年生のある子は、なかなか友だちの輪に入ることができず、休み時間も一人で過ごすことが多い子でした。でも、その子は花や空を見るのが好きで、遠足の時にも、みんなが見向きもしない小さな花や、澄みわたる青空を見上げて一人喜んでいる姿が、今でも印象に残っています。

授業中は静かに学習しているのですが、窓の外を眺めていることが多い子でした。授業の内容をしっかりと理解しているというよりは、まるで“自分の世界”にいるかのようでした。私はその子が気になり、「授業中はどんなことを考えているの？」と尋ねました。すると、「空がとてもきれいな日は、いつまでも見つめていたい気持ちになるの」と返ってきました。その瞬間、私は思いました。

—— この子の感性は、人一倍鋭い。これは確かな“良さ”である。この“良さ”をつぶしてはならない。

—— しかし、授業中に窓の外を眺めていることが、将来のためになるだろうか。

そして私は、理科の「雲の様子」や「天気の変化」の単元で、その子を中心に据えた授業計画を立てることを思いついたのです。

早速、授業計画についてその子に話してみると、大いに興味を示し、授業前にも関わらず、自ら図書室で教科書の内容を調べてくるほどでした。これまでには見られなかったその子の姿には、学習意欲があふれていました。次第に理科への理解は深まり、「分かった」「できた」という実感が、その子の表情に表れるようになりました。そして、ただ眺めていただけの世界が、「確かめたい対象」へと変化しました。その学習意欲は、他の授業にも広がっていきました。

このことを通して私は、本人が大切にしていた感性が教師に認められ、学習内容と結びついたことで、学びに意味が生まれたのだと考えました。「空を見つめることで“自分の内面が満たされる喜び”を感じ、その豊かな感性が学びの土台となり、学習内容への理解も深まりました。その結果、「できた」「分かった」という達成感を得ることができ、それが成果や評価にもつながっていき、さらにその経験が、感性を磨こうとする意欲を生み、新たな学習課題への挑戦へとつながっていったのです。



人を喜ばせる子

校区に商店街がある小学校で高学年の担任をしていた時のことです。いつも笑顔が絶えないある子の家は、商店街の魚屋でした。年度初めの家庭訪問では、保護者のご意向でお店に伺うことになりました。お店で保護者と話をしている間にも、お客さんが次々と訪れました。そのたびに、その子が笑顔でお客さんに対応していました。その穏やかな表情や言葉からは、その子の“良さ”があふれていると感じました。そして、こう思いました。

—— 保護者の方は、その子の「お店での姿」を見せたかったのではないかと。

—— 学校だけでなく、大人に対しても自然にコミュニケーションが取れる子なのだ。

卒業文集の「将来の夢」には、「ケーキ屋さんになって、たくさんのお客さんに来てもらいたい。街の皆さんが喜んでくれることが嬉しいから」と書かれていました。

二人の姿が教えてくれたもの

成長した二人の姿は、まさに冒頭で紹介した三つの視点を体現していました。彼らの歩みは、「学び続けること」そのものが幸せであり、その学びを支えているのは「人とのつながり」であることを教えてくれました。また「学力」とは、学校で学ぶ教科内容にとどまらず、生涯を通して出会う人や環境、情報の中から、自らの生き方を方向づけていくための「総合的な力」であることにも気づかされました。そして何より、子どもの“良さ”を出発点として学びを深め、それを人や社会との関わりの中

その後、同窓会で何年かぶりに再会しました。

「久しぶりだね。立派になったね。今はどうしているの？」
「専門学校でお菓子作りを学びましたが、いろいろな人と出会う中で、それぞれの生き方に触れることができました。その経験から興味の幅が広がり、現在は美容室で働いています。将来は、みんなを笑顔にできるような美容室を開きたいと思っています」

誰よりもコミュニケーション能力が高かったその子は、人とのつながりを大切にすることができた。卒業後も、この“良さ”を生かして多様な人と出会い、関わる中で自分を磨き、進路を育てていったのです。そして、めざす方向が変わっても、“人を喜ばせたい”という軸は、決して揺らぐことはありませんでした。その姿は、まさに「学び続ける人生」そのものだと感じました。人とのつながりが、自分自身を更新し続ける力になっていたのです。

で磨き続けられるように支えることこそが、教育の本質であると、あらためて実感しました。

「空を見つめる子」も、「人を喜ばせる子」も、それぞれが自分の“良さ”を生かしながら学び続け、成長していきました。この二人が歩んできた軌跡は、“子どもの幸せ”そのものであったと確信しています。二人の姿に思いを巡らすたびに、“子どもの幸せ”を教育のど真ん中に据えることこそが、私たちの使命なのだ、より強く感じています。

スマホで見られる、おすすめコンテンツ

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」

授業が変われば
学びが変わる！
子どもが変わる！

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

こちらから
ご覧下さい



教師向けの特別コラム

関西学院初等部

森川 正樹 先生の「教師の細道」

授業で勝負する！目の前の子どもをどうするか・・・
日常の授業で使える何気ない場面を紹介します。

こちらから
ご覧下さい

